

あらうから、手ツ取り早く私の句に例を採り、詳しく述べてみることにする。ともあれ、先づ話の順序として、句を最初に掲げて置く。

信州野尻湖を舟遊して

湖 紫 紺 妙 高 秋 と 争 は ず

この句は讀んで字の如く、野尻湖は紫紺の色を湛へて居り、湖水の上には妙高山が高く聳えてゐるが、秋そのものに争ふかのやうな姿も見えず、至つて静穩である、といふくらゐのところである。かう片付けてしまへばそれまでであるが、何故に私がこの句を作つたか、即ちどんな感があつて作つたのか。これからが解かうとする問題である。

いふまでもなく野尻湖を舟遊してゐた私は、湖水の色の紫紺に魅惑されたものゝやうに、殊に舟が辨天島を離れてからは、絶えず水色の美しさに驚嘆の聲を發してゐた。更に、湖底には恐ろしい龍でも棲んでゐやしないか、などと幻想を描くことさへあつたのである。

それから何氣なく顔をあげたとき、物凄く大きい高い山が目に入つた。その山は妙高山であつて、何ものをも威壓するといつた、堂々たる容ちをそなへて聳えてゐる。みるみるうちに、吼えつくやうな、喰らひつくやうな、さながら鬭争を開始しようとするやうな勢ひさへ感じられて來た。これが所謂私の感であるが、これだけの感では、俳句を作るまでには至らなかつたかもしれない。なぜな

らば、詩味に乏しい感といはなければならないから。

勿論私が右の句を作る過程に於ては、そんなことを考へてゐる餘裕などは少しもなかつたのである。たゞ説明の都合上、筆を添へたのであることはいふまでもない。従つて右に述べた最初の感には、作者である私とて全然意識をしてゐない。話は又前に續くことになるが、争ひを挑むに似た妙高山から、目を離れたその瞬間であらうか、或ひは未だ目を離さずに大空を見たときであらうか、「秋」といふ大きなもの、犯すべからざるものに、靜かに穩やかに妙高が突立つてゐたのである。かうして筆をとつて書いてくると、次から次へ私の考へが移り、感じ方が變つて來たやうにみられるが、事實は決してさうでなく、こゝに始めて今言つたやうな感が出来、さうして忽ち句に纏まつたのである。別言すれば、この感を得たのは、湖の水を見ると同時に妙高山を見て、直ちに構成されたものであつて、其間に時間的なる間隔もなければ、又考察に要する餘裕もなかつたのである。それであるのにこまかしく、第一の感、第二の感が出来たやうなことを言つたのは、どうしても説明する上に於て、言はなければならなかつたからである。

若しもこの感、すなはち紫紺の湖を抱いてゐる妙高山、一寸見るとまさに荒れ狂はん姿でもあるが、秋に従つて、靜かに坐つてゐるといふところ、この感が詩的に貧困なものとなつたならば、假令私は句を作つても、捨て、しまつたであらう。私がこの感を得たときは、偽りのないところを申

せば、可愛い坊やの頭を撫でるやうに温かい心をもつて、妙高山を撫で、やりたかつたのである……。感には意志の入ることを許さないのであるから、感を得ようと意圖して得られるものではない。又ちよよいちよ力強い感を得ようとしても、われわれの身體がこれを許さない。大體感の出来るためには、全身が緊張し、一つのものに統一されなければならぬことは勿論であるが、その場合、詩的飽和状態に置かれなければならない。そこでより高いより強い、且つ異色ある感を得るためには、人生的苦惱を複雑に、強烈に經驗することが必要とならう。およそ藝術的に純粹なる感とはかうしたところに立脚したものを指すべきであらうと思ふ。例へば複雑多彩な人生は、叩いてもそれ相應の響きが出る。これに反して平凡な經驗や人生からは、單純な響きが出るだけである。

ロマンチズムとリアリズム

ロマンチズムをもつとも好都合に譯すとすれば、華想主義といつたところではあるまいか。即ち自分が想像する或世界に、美しい花を咲かせたものと見なくてはなるまい。これがためには、作品の内容及び形式に、出来る限りの魅力を持つことを必要とする。又云へば表現された言葉以外に、鑑賞者をして十二分に魅了するだけの、情緒的な深さや高さや豊かさや美しさなどを、具へてゐなければならぬことになる。

かうした句は各雑誌に於ても一々例を擧げるまでもなく非常に多く見當る。つまり作者の情熱の昇華したものであるがために、第三者を引きつける力を持つてゐるといふことが出来よう。すなはちここに素晴らしい俳句的價値が存在してゐるといつてよいのである。何となれば、ロマンチズムの句は、内容と形式とが情緒的魅力を多分に含んでゐるから、句を讀みたいといふ心をそより、次に讀めば美しい世界が展開しさうに思はれるので、更に知的な慾望をそより、やがてその句が持つ素材や情景に同化せんとする自分の感情が構成され、次に完全にその句の詩感に陶醉させる力を秘めてゐるものといはねばなるまい。

そこでこの力の大半を支配するものは何であらうか。それはとりもなほさず、作者の第一印象及び鑑賞者の第一印象といふことになる。従つて少くともわれわれは、第一印象に魅力あるものをつかまなければ、遂によき句を求めることが出来なくなるのである。但し印象は具象的に異色ある世界を現出せしめるものでなければならぬ。即ち「あり得るであらう世界」を創らねばならないわけである。

若しロマンチズムが空想主義と解されるごとく、俳句をしてさうした方面へ進ませようとするれば、いふまでもなく藝術を無視した自由なる想像の發展となり、遂には救ふことの出来ない俳句が作られることになる。こんな俳句ならば、全く需要のない給供をするに等しく、第三者には少しもかゝはることなく、作者自身が勝手に陶醉して悦に入るか、さもなければ徒勞の石を積み重ねてゐるに過ぎない

ものである。

次にリアリズムとは誰しも承知であるやうに、寫實主義又は現實主義である。即ち「あり得るところの世界」を指してゐるわけである。従つて文藝的には實在するところの、優秀なる世界を作品化しなければならぬのである。さうするとロマンチズムとは、全く背中合せのところまで、即ちロマンチズムは裏、リアリズムは表ともいふべくそこまでの高さへ到達しなければならぬのである。それにもかゝらず現代に於ては、リアリズムといへば、直ちに生活を基本とした現實把握であるかの如くに誤解されてゐるやうである。

謂はゞ自然描寫の俳句に對抗して、社會生活の事象を詠むことが、とりもなほさずリアリズムの俳句である、といふ見解を持つてゐる方が多いやうである。リアリズムもかうした低級な皮相なものに見られては、全くなさけないことである。或人は社會及び人間生活の暴露を以て、リアリズム俳句の擴充といひ、或人は日常生活に科學的なものを加味して、以て最も勝れたリアリズム俳句であるといひ、又或人は戀愛現象を大膽に説述して、以てリアリズムの浸潤擴充であり、發見であるといひ、得得としてさうした事象を俳句に詠んでゐる今日である。

かうした實踐も、若し詩性に豊富な俳人であるならば、更に藝術的良心に富んだ俳人であるならば、成程リアリズムもより以上高められるかもしれないが、多くはわれわれの周圍のものを素材として、

そこに珍奇性と大膽性とを狙つて作り上げた俳句である、といひたいのである。そこでわれわれは藝術的責任を持つてゐる立場から、珍らしいところを詠んだ句だ、よくも大膽に云へた句だ、といつて耳を傾けるぐらゐが關の山である。畢竟するに今日リアリズムの句と稱してゐるものは、殆んど社會及び生活の説明、それがたゞ方法と態度を變へたところの説明に過ぎないといつてもよいであらう。

かやうに誤謬に中毒してゐる新興俳句の連中を取上げて、一々その句を非難してゐる餘裕がないから觸れないことにするが、例へばわが塙温々氏の如きは、苦悶ある毎に私を訪問され、リアリズムの高潮した句をものしようとして、眞剣に努力されつゝある人であるから、今後の氏の作品は注目に値するものである。

もともと理論があつて俳句が出来たのではないから、理論通りに俳句を進めることなどは到底出来ない。われわれの俳句は、出来上つてから型に分類されるものであつて、最初から型に嵌めようとして作れるものではない。それほどにわれわれの句作能力が複雑なのである。但し作句のよりよき價值を見出すためか、又は俳句觀を打開し開拓するために、かやうな俳句の行方を見守ることもあながち益のないことではない。

個性俳句の一考察

私は個性のない俳句を極端に排斥してきたが、俳句に個性がなければならぬことはいふまでもない。といふのは俳句が俳句のための俳句でなくて、日本民族文化の発展に於ける一個人、即ち作家その人の俳句であることを、絶対にみとめてゐるからであり、又それを主張するからである。

例へばわれわれが氷を見て、氷は水が凍て、變化したものである、といふ以外に感じてはならなかつたり、又それ以外に言葉を用ひてならないとしたならば、そこには恐らく藝術も文學も生れないことであり、ましてや文學の進歩發展などは、到底あり得ないことである。

しかしこんなことは、われわれの生活に於て、絶対に許されるべきものではない。氷を見て、或る人は鏡と感ずることもあらう。或る人は水晶と感ずることもあらう。又或る人は美味しいお菓子と感ずることもあらう。かやうにわれわれの感じ方は多種多様である。百人が百人、異つた感じ方を持つのが當然である。凡そ文學は、こゝでは俳句についていふが、とりもなほさずこの感じ方の自由さに俳句が存在してゐるのである。そして個性とは、各々異つたこの「感じ方」をいふに過ぎないのである。

これで簡單ながら、われわれは個性とは大體こんなものである、と解してよろしいであらう。しかるところ個性とは、自分の勝手な感じ方でよいのだ、とさう決めてをられる方が少くはないやうである。そのせいか、個性に似て個性のない俳句、あやまれたる個性俳句が、いとまなく作り出される。

やうに見うけられる。

かうした結果を招來するといふのは、感じ方の自由を履き違へてゐるからであり、又感じ放題といふことに、多分の誤謬を含んでゐるからである。甚だしきは、感じ方を考へ方と間違へてゐる人がないでもない。従つて私はそんな母體から生れた俳句を、非個性の俳句、個性以下の俳句、といつて嘲笑したくなるのである。

例へば、春の太陽を見て自殺したくなつたといふ感じや、夕立を見て血が降つてゐると感じたりすることなどは、結局正しからざる感じ方で、往々不健康なる知覺の支配するところである。個性はつねに正しい知覺、健康な知覺に立脚してゐなければならぬものであつて、斷じて錯覺や妄想であつてはならない。

併しながら鋭敏なる感覺の所有者は、常人の想像を許さぬ高所を彷徨し、或ひは奇想天外、或ひは錯覺と見間違はれるやうな感じ方を示すことがしばしばある。例へば、公園の木立に降る雨を見て、枝がゆらゆら揺れながら花が咲きつゝある、と見る感じ方や、しのゝめの空を流れてくる霧を見て、碧い霧と感じたり、雲の去來に接して、はなやかなる音を感じたりすることなどは、若しも正しき知覺の上に立つところの感覺であつたならば、立派な個性として尊重しなければならぬものである。

われわれは、個性をして絶えず藝術圏外に出でないやう、注意を怠つてはならない。このことは換

言すれば、素晴らしい感覚も想像も、つねに正しい知覚から出發せよ、といふことに他ならない。先に例を挙げたやうに、われわれは林の中を流れてくる朝霧が、決して碧い霧でないことはよく承知してゐる。けれどもそれを碧い霧に感じ、そしてそこを翔けゆく一鳥を見つけたときに、自分だけが發見したところの佳境を、一俳句におさめるのである。かやうに感じたからこそ詩が生れ、一俳句に纏つたといふわけである。これに反して、或る子供は、戀猫の交むところを見て猫が喧嘩してゐると見る、又猫が戯れてゐると見る、成程さう感ずることはおもしろいに違ひないが、それはいふまでもなく、交尾するものであることを知らないといふ、誤謬にもとづくものであるから、間違つた感覺として一蹴されなければならない。われわれが若し猫の交尾を知つてゐながら、子供のやうに風變りな感じ方をしたとするならば、そのときが個性であり、詩が生れてくるのである。何となれば、正しき知覺の上に立つところの感覺が、美しく發展したことになるからである。

よく新感覺とか、新現實とかいはれるが、それは要するに異色ある個性のあらはれであつて、別に新しい感じ方があるわけなし、又現實を新しく見る方法があるといふでもない。個性が飛躍して尖鋭なものとなつた場合は、常人から見ると、全く寢言みたいなものに思はれたり、錯覺であるかのやうに思はれたりすることもあらう。従つてその俳句を理解する人は愈々減つてくることとなる。けれどもそれは、餘りに平凡な人と餘りに非凡な人との對照にも似たものであつて、個性の向上とも

に、必ず理解されるときがくるものである。徒らに個性を低めて、大衆に近づけようとしたり、普遍妥當性のある個性をなどと、餘計な苦勞をして、却つて自分の藝術を傷けるやうなことがあつてはならない。

次に個性を俳句に生かす問題であるが、個性ばかりが如何に優れてゐようとも、所謂俳句觀が貧弱なものであつたならば、到底よき俳句は求め得られないことになる。

われわれは俳句をかく考へる、俳句をしてかやうのところへ到達させたい、といふやうな希望を持つてゐるものである。この自分の俳句の理想といはうか、さうした考へはつねに眞直な道を歩むやうに、一本調子に行けるものではないのだから、つねに明かに確固たる俳句觀を持たねばならぬといふことは出来ないが、それにしてもわれわれは、自分の俳句觀に相當自信を持つてゐなければならぬ。若しさうでなかつたら、われわれの個性は、自分の俳句に完全に生かされないことになる。すなはち自分の俳句は、個性の赴くまゝとして放任するならば、時には素晴らしい藝術俳句になることもあらうし、時には月並な古俳句の型を採つて作り出されることもあらうし、又時には自由律俳句の型を採つて作り出されることもあらう。

ところで、俳句といふ問題を他所にして句を作るならば、どうでもよいのであるが、苟くも自分の俳句のために句を作り出すといふのであれば、自分の俳句の獨自性といふことを度外視してはならぬ

これを要するに、個性が高く濃く、俳句観が鮮かに樹立されてゐてこそ、獨歩の内容と、獨白の俳句型式とを具へることになるのである。

印象 開花

印象の句作法を大體三つに分類することが出来る。

その一は、現實のものを現實の俳句にすることである。これをくわしくいへば、目に訴へるもの、耳に訴へるもの、鼻に訴へるもの、其他すべての感覺を、知性の増埒に入れて、俳句に纏めることである。この場合は、現實が句の動機となり、又現實が句の結果をなすものである。従つて句に漂ふところのものは、現實以外のものであつてはならないといふことになる。但し名句になると否とは、感性和知性の混合如何にかゝはつてゐる。そこで私はいふ、現實のみにこだはつてはいけない、自分のみにこだはつてはいけない、又云へば感性にこだはり過ぎてもしなければ、知性にこだはり過ぎてもしけないと。

例へば、——或る夕方であつたが、子供を連れてあてどなく歩いてゐると、祠の前に出た、ふと見ると、竹の葉には蝸牛がとまつてゐる、「ほら、かたつむりが」といつて子供に見せたら、子供は喜ん

でゐる、蝸牛は私達に見つけられたからではあるまいが、ぼたりと地上に落ちた、勿論どこへ落ちたかわからない、歸らうかと思ひながら前方へ目を移すと、遠くから女工さん達が、一とかたまりになつて歩いてくる、夏の日は暮れやうとしてなかなか暮れず、今までにないやうな蒸し暑ささへ感じられる——これを

夕 づ ぐ を 蝸 牛 落 ち 蒸 し 暑 き

苔 里

と作られたのである。この句は一見してわかるやうに、現實の對象を巧みに取捨選擇し、その間に程よく感性を働かせられた句である。

その二は、一の場合よりもやゝ六ヶ敷い句作法かもしれない。といふのは、現實に過去が入るからである。これをくわしくいへば、現實のものから印象をうけると同時に、直ちに潜在印象が蘇生して、こゝに別個の印象が焼きつけられる。従つて最初の印象は、潜在印象の引出し役位のところ、現實のものとは似ても似つかぬ印象に變化してしまふ。この場合には、無意識裡に作者の感がはたらき、夢が發展してゐるものゝやうである。併しながらこの時の想像力は、大抵過去の好印象に原因してゐるのである。勿論、過去の印象に原因しないものが澤山あるけれども、それらについては、第三の場合にいふこととする。

今手近な例を擧げて説明してみよう。——幾度も通つた道であるが、今日のやうに晴々とした秋日

和は、近頃になかつたやうである。そのせいも、突き當りの家、竹に囲まれた家が素晴らしく美しく、忽ち春の嵯峨で得た好印象が飛び込んで来て、えも云はれぬ好印象を得たのである。つまりこれを句作的に云ふと、この竹の家の中には、高僧が詩を朗讀して居り、竹の葉ずれの音の合間々々に、小川の流れが響いてくる。と思ふと、その家だけが秋日をほしきまゝにして、浮き立つかのやうに見えてくる——。かうなるといふまでもなく、現實だけの印象ではなく、現實と過去の好印象が一しよになつて、花が咲いたといふやうなかたちかもしれない。このやうな印象を得て、句材にしようとするためには、ふだん想像力を豊富にすることが必要であり、又夢が多くなければならない。

その三は、甚だ高踏的であるかもしれないが、現實の印象があると同時に、潜在印象に拘はることなく、忽ち別個な詩的世界を生む場合の句作法である。これを別の意味からいへば、現實の印象が發炎して、其處に素晴らしい想像力がはたらき、たちどころに豫期しない美の世界が、展開するといふわけである。今更例を採るまでもなく、これだけで理解されるところであらうが、この句作法は常道を外れることが多く、或は狂的或ひは病的な印象を構成することがあるから、句作後は充分吟味する必要があると思ふ。すなはちその内容が、自己の發展として可なりや否や、又俳句として許せるか否かを、吟味しなければならぬ。

—(完)—

新選俳句季語總覽

元日	二日	三日	三日ケ	五日	七日	松の内	松の内の	去過ぎ	舊正月	新年	初春	正月
小正月	廿日	春日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日
名刺	年賀	年賀	日積	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日	初日
書初	稽古	政治	御用	仕事	山始	新年	出初	弓初	御講	人日	學日	陸軍
蟲除	玉除	歌仙	左義長	女正月	藪入	御歌	鏡臺	骨正	店卸	初句	新年	初茶
嘸初	論初	御能	初鼓	語初	彈初	吹初	初寫	初鏡	初鏡	初鏡	初鏡	初鏡
破魔弓	歌留多	雙六	羽子	振々	毬杖	手毬	騎初	初髮	初髮	初髮	初髮	初髮

初 燈 天 祖 燒 接 寶 遊 閻 八 十 居 常 若 鶯 玉 祇 初	公 師 公 金 神 駕 切 詣 參 戎 籠 事 事 替 競 掛 申	初 庚 削 掛 申															
春 の 宵	春 の 晝	春 の 朝	春 の 曉	【春之部】	穗 依	裏 白	野 老	葉 丹	標 牡	若 菜	福 草	嫁 君	初 鴉	初 雀			
上 啓	彼 春	春 分	春 分	立 春	三 月	四 月	長 閑	麗 閑	暖 閑	春 淺	三 月	二 月	臘 夜	春 の	日 の	春 の	夜 永
春 の 日	夏 の 日	暮 の 日	春 の 日	春 の 日	餘 の 日	牙 返	土 戀	寒 明	蛙 の 目 借 時	木 の 芽 時	茶 摘 時	鮎 時	花 時	蠶 時	八 時	雨 夜	穀 水 雨
初 風 光 雷	貝 寄 風	涅 槃 西 風	春 の 雷	油 風	東 風	春 風	霞 風	陽 炎	花 曇	春 空	春 雲	春 月	春 星	春 曙	春 陰	春 光	
鳥 曇	蜃 樓	木 の 芽 風	海 苔 雨	鯨 曇	春 霜	春 霞	春 電	別 霜	春 露	雪 果	春 雪	春 霖	菜 種 雨	春 雨	初 虹	初 電	

長 年 蔗	春 打 駒	火 打 合	早 乙 女 踊	ま さ る 賣	初 音 賣	懸 想 文 賣	獅 子 舞	傀 儡 師	猿 曳	ち よ ろ	鳥 追	萬 歳	初 場	寶 引	起 上	福 引	ぼ つ ぺ ん
小 豆 粥	具 の 鏡 開	七 種 粥	飾 夜 具	二 日 著	春 袋	初 染	初 初	織 初	縫 初	春 著	著 始	春 衣	博 錢	搖 賭	噴 樹	飯 春	春 花
若 昆	結 布	掛 鯛	押 鮎	芋 頭	開 豆	開 莖	數 子	重 詰	田 作	福 沸	年 酒	屠 蘇	太 箸	鏡 餅	若 餅	雜 煮	粥 柱
注 連	松 納	飾 松	門 料	甜 茶	甜 菜	長 聯	春 始	旭 菜	蓬 盤	春 積	食 斗	熨 斗	串 柿	柑 子	飾 海	火 水	大 福
元 始	船 靈	延 壽	四 方	初 電	初 火	初 庭	初 手	初 年	初 湯	初 男	初 湯	初 曆	掃 初	福 葉	飾 炭	飾 白	鳥 松
初 己	初 辰	初 卯	初 寅	初 子	初 不	初 天	初 大	初 觀	初 祖	初 金	初 藥	初 水	螺 納	初 惠	若 方	七 福	人 詣

花種蒔く	朝顔蒔く	芥子蒔く	鶏頭蒔く	牛蒡蒔く	瓜蒔く	茄子蒔く	藍蒔く	麻蒔く	蓮蒔く	ダリア蒔く	睡蓮蒔く	芋蒔く	木の實蒔く	桑蒔く	苗木蒔く	茶蒔く	蕨蒔く
梅見	桃見	桑摘	蓬摘	野老堀る	百合根堀る	蓮根堀る	養蠶	接木	挿木	松の手入	取木	根分	菊の根分	菖蒲の根分	車組む	漁夫来る	雪切り
漁季休み	鯨割き	掛架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架	鉢架
胴衣	春の帯	春の巾	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛	春の掛
浅汁	若布汁	海苔採る	枸杞摘む	令法摘む	五加摘む	花見	踏青	紙船	石船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船
蟹汁	櫻餅	白餅	櫻餅	草餅	菱餅	椿餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅	蕨餅

残雪	雪解	雪解	凍氷	春氷	雪崩	返る	野山	春泥	春水	春温	春川	春海	春湖	春浪	春濱	春湖	春濱
春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪	春の雪
出代	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月	二月
寒食	観櫻	種痘	彼岸	紙船	石船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船
若布	海苔	枸杞	令法	五加	花見	踏青	紙船	石船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船	風船
鴨川	蘆邊	吉原	中原	島原	中出	既出	羊毛	畦塗	田畑	耕田	田畑	田畑	田畑	田畑	田畑	田畑	田畑

二輪草	碇南天	小檗子	紫葉薔薇	剪髮草	菠薐草	酸漿	酸漿	黃蘗	喇叭水仙	天竺水仙	水芭蕉	烏菴草	慈姑芋	毛茛		
小麥	芝罘	雀巢	竹筍	春芽	芋荷	茗荷	蕁荳	蔞子	瓜若	草若	蘆角	未黑	木蓀	若菜	土筆	
薔薇	藤	鹿尾菜	若布	つる	海苔	青海苔	青苔	白萩	枸杞	連翹	黃梅	馬酔木	花躑躅	躑躅	石楠花	
令法	青木	山茶	おにじり	沈丁花	三極	黃楊	椿	ひさかき	花さかき	枳殼	夏蜜柑	蜜柑	山椒	楓	藥	
櫻	殘	杏	海菜	四季	莓	木瓜	草瓜	小粉	山檜	李	李	櫻桃	梨	郁李	通草	
雪柳	山櫻	棠梨	棠梨	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎	榎

スボリイリ	水仙	庭石	姫著	ヒヤシンス	あまど	萬年青	片栗	きばな	やうじ	んじ	りたけ	チューリツ	はな	ひな	貝母	
ルリムスカ	山歸來	胡荽	春蘭	ほうさい	蘭	海老根	くまが	うま	蓬	野薔薇	のげ	はま	落	もく	嫁	
高草	かのこ	驚	りいぬ	さう	櫻	九輪	九輪	をどり	垣通	こりん	筋	夏	紅	瑠璃	接骨	
やぶ	芹	血止	三葉	防風	忽	きうり	ほたる	ら	五加	獨	櫻	仙	紫	首	豆	
藤	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫	紫
せ	に	ほ	い	と	う	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら

夏	夏	夏	夏	夏	虹	喜	夕	虎	御	卯	梅	盆	筍	夏	土	青	夏
の	の	の	の	の				が	山	花	東	東	梅	の	東	嵐	嵐
雪	霜	霧	霞	露	雨	立	雨	洗	し	雨	風	雨	雨	風	嵐	嵐	
苦	潮	土	五	夏	夏	夏	夏	五	夏	夏	五	五	富	五	電	雷	海
香	用	月	の	の	の	の	の	月	の	月	月	月	士	月	雷	霧	
湖	る	浪	浪	海	湖	水	川	川	野	山	野	山	雪	解	閣		
菖	蒲	端	風	夏	林	暑	歸	徴	海	雪	清	瀧	夏	泉	青	滴	お
蒲	葺	爐	爐	期	間	中	兵	軍	軍	雪	水	庭	の	庭	田	り	島
打	く	午	茶	講	學	休	檢	紀	日	谿							
後	竹	盆	中	草	矢	硯	掛	幟	幟	草	藥	藥	藥	印	飾	菖	菖
の	植	の	中	市	數	洗	下	市	合	玉	日	る	打	甲	湯	刀	
藪	う	掛	元	市	數	洗	す	市	合	玉	日	る	打	甲	湯	刀	
入	る	日	乞	元	市	數	洗	す	市	合	玉	日	る	打	甲	湯	刀
汗	三	晝	肌	汗	裸	洗	井	洗	蟲	打	行	蚊	七	七	七	棍	七
尺							戸	ひ					夕	夕	夕	の	
疹	寝	寝	脱				替	髮	干	水	水	遣	踊	鞠	竹	葉	夕
納	船	海	登	避	べ	赤	コ	霍	腋	脚	暑	夏	寝	日	日	恙	水
	水				ス	レ					氣		射	蟲			
涼	遊	浴	山	暑	ト	痢	ラ	亂	臭	氣	中	瘦	冷	病	燒	病	蟲

谷	蕾	笹	笹	菰	蒜	野	ス	ア	寄	柳	柳	楊	榎	榎	銀	か	赤
地	起	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	杏	つ	楊
落	櫻	る	實		蒜	蒜	カ	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
相	春	蒲	玉	龍	へ	水	月	た	た	茄	珊	胡	木	檳	苦	亞	樺
思	落	葵	の	の	の	刀	來	あ	は	冬	刺	蝶	綿	椰	芥	麻	の
仔	葉	花	蘭	花	ご	連	香	づ	き	ぜ	樹	桐	蘭	花	花	花	花
夏	夜	短	夏	夏	夏	夏	夏	夏	七	六	五	水	阜	卯	夏		【夏
立	の		の	の	の	の	の	の				無					の
つ	秋	夜	夜	宵	晝	日	朝	曉	月	月	月	月	月	月			部
拾	梅	入	麥	夏	涼	暑	薄	初	夏	土	三	大	小	半	夏	芒	夏
雨	の	し						淺						夏	け	め	
時	時	梅	秋	寒	さ	さ	暑	夏	し	用	伏	暑	暑	生	至	種	く
五	炎	梅	夏	盆	夏	夏	夕	朝	朝	日	夏	夏	極	秋	暮	夏	
月	雨	の	の	の	の	の	の	の	花	の	の	の	の	近	の	深	
晴	天	空	空	月	月	星	燒	燒	も	曇	陰	日	句	暑	し	夏	し
朝	筍	や	御	麥	山	な	黄	夏	南	黒	温	風	雲	夏	早	油	日
流	ま	祭	祭	の	瀬	が	雀	の	南	南	燕	の	の				
風	し	風	風	風	し	風	風	風	風	風	風	る	峰	雲	照	盛	

麥刈る	蠶豆引る	藻刈る	萱刈る	眞菰刈る	藍刈る	蘭刈る	麻刈る	菜種刈る	茄子植うる	芋植うる	豆蒔く	黍蒔く	棉蒔く	粟蒔く	稗蒔く	胡麻蒔く	椿接ぐ
縮木布	ネル	セ	菖蒲浴衣	浴衣	拾	綿	白	更	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏
編田笠	植布子	夏足袋	夏手袋	腹巻	夏帯	汗取	汗襦袢	汗巾	清涼着	簡單着	甚	夏	夏	夏	夏	夏	夏
冷酒	ビ	團扇	扇	夏洋傘	日傘	蒼	香	掛	踊	田	踊	苳	林	太	白	白	夏
柏餅	葛餅	葛餅	粽餅	妙餅	鮮餅	冷汁	冷汁	筍	麥飯	洗飯	乾飯	甘酒	梅耐	燒耐	煮酒	泡盛	淺茅酒
ソイダ水	サイダ	シトロン	ラムネ	キルクセル	アイスクリム	氷菓子	冷し瓜	冷し瓜	冷し瓜	冷し瓜	白	茹小豆	水羊羹	蜜豆	餡豆	金玉湯	金

定齋賣	土用灸	天瓜粉	風祭	夜能	ながし	盆狂言	五月狂言	夏芝居	夏場所	暑中見舞	川開	水	水	水	水	瀧	川	端
草笛	麥	稗	岐	西	起	走	燈籠	燈籠	浮	水	花	花	振	枇	香	毒	暑	暑
麥	踊	釣	鵜	川	築	夜	川	狙	家畜を洗ふ	鬪	絲	繭	蠶	新	新	水	樟	樟
ぶわ	厄	あご	番	園	漁	海	草	雁	漆	田	田	夏	袋	船	地	夕	水	水
始政	焚	園	昆	山	湯	孫	苗	木	緑	溝	誘	驅	雨	水	水	田	蛇	蛇
鹽	蚤	瀬	鯰	根	燒	養	洗	木	家	揚	龍	箆	蛙	夏	夏	香	半	半
賣	取	戸	切	刈	耐	魚	濯	藍	家	水	骨	賣	捕	打	刈	色	丸	丸

四	蟬丸	栗忌	城隍爺祭	札幌祭	天神祭	施餓鬼會	祇園會	鞍馬の竹切	山王祭	伊勢祭	藤森祭	四萬八千日祭	縣祭	東照宮祭	夏行	墓參	大文字の火
信	三光翁	佛法鳥	雷鳥	鹿の袋角	夏の鹿	水の鹿子	鹽臍交る	楠公忌	頼政忌	宗祇忌	支考忌	丈山忌	會良忌	季吟忌	光琳忌	業平忌	
鷹	海鷗	鶉	水練雲	羽拔	夏鳥	翡翠鳥	割葦鳥	鷓鴣鳥	蚊吸鳥	青鳥	筒鳥	編鳥	老鴛鴦	時鳥	閑古鳥		
正	田龜坊	龜の	蛇衣を脱ぐ	守宮	蛸	飯匙	腹蛇	鴛鴦涼し	鶉の巢	水鳥の巢	通し鴨	土番鴨	黒鴨	鴨子	燕の	鴉の	鴉の
蝸	蟻	馬陸	船蟲	源五郎	鼓蟲	水馬	山魚	蠟牛	蝸牛	蛞蝓	蠶	蚯	落文	河鹿	蟬	墓	枝蛙
蠅	蠅	瓜蠅	蠅	蠅	白蠅	羽蠅	蟻	蟻	蚊	蜻蛉	狭蜻	蓼喰	呀喰	油喰	蠅	蜘蛛	蜘蛛

新	蓮	土用	新煮茶餅	煮梅子漬	燒茄子漬	梅干漬	干瓜漬	瓜漬	瓜揉	冷魚湯	麥水	振舞水	葛水	砂糖水	氷水	レモン水	
新	土用干瓢	泥鰌汁	目摺	水貝	水鱸	水鯉	燒干鰻	干鰻	洗鰻	背ごし	沖節	生節	新鳥	干皮	煮取	干河豚	
夏	葭籬	籬戸	夏の燈	太甲	花英座	著英座	夏蒲團	夏蒲團	ハンモック	衣紋竹	敷紙	冷庫	氷室	酢造る	醬油造る	奈良漬	
吊	風	蠅	蠅	蠅	泉	噴	バルコニー	扇風機	水枕	籠枕	竹床	籬椅	抱籠	箆	蚊帳	銀篋	日覆
稻	馬生玉の流	祭	千團子	大原志	佛堂大念	閻魔	練供養	加茂祭	淺草祭	祭	大祭	夏神樂	夏の鏡	夏の館	夏の敷	水盤	箱庭
送	生身	靈	盃	魂	門	明治天皇祭	御田植祭	御手洗節	聖靈節	峰尾	松馬	野馬	加茂の競馬	雨乞	富士詣	奥詣	飯詣

黄踊夏し草草紫葎草荳山山破矢柳矢麥深 金子枯石蠶石茂茂の牛母苦蒲公車程山嫁 花草草ま蠶蘇るる花莠子笠薊英菊菊菜
小水サ白撫ヨカ佛葵棉紅ぎん矢緋花花香松サ 町仙ボ玉ネ桑の蜀ちせん車薄衣薄虎明ル 草翁草草子シ花花葵花荷草荷尾の蒸花ヤ
花茄天朝筑青唐葉ト煙枸馬胡夕飄絲南瓜 煙竺朝鮮朝顔漿酸辛子の蕃ト草杞の鈴薯の瓜 草子守顔顔漿花椒花花花花花花花花花花
車柳瑠姫釣ヂ朝桐金雀西胡越瓜草水鬼瑠 前草丁璃璃虎鐘ギ鮮の魚瓜瓜瓜瓜瓜瓜柳 の花字尾尾柳尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾尾
桔花丁日夾み美だ演臭馬蓮蕁河睡蓮蓮大 梗魁字々竹むら女んぎ木の鞭浮のの鬼 撫子草草草桃さき櫻く櫛花草葉菜骨蓮實花蓮
留夜晝朝朝紫牡深山山山釣千鐵山芍黒唐風花 紅顔顔顔苗草丹山山山山山山山山山山山山 草顔顔顔苗草丹山山山山山山山山山山山山

兜玉蝶斑穀天夏夏螢汐蛎蛆蛋蛭紙蚊子 象蠶の 蟲蟲蠶猫蟲蠶蠶蝶蟲魚子
鱒鯉鱒鮪黑鯉喇鯰濁鯉日金サ蟹毛火尺金 子子子子子子子子子子子子子子子子子子子 鯛鯉鮪高魚ニ子蟲蛾蠅子
鮎山岩麥蝦飛石麥赤鯖つだ鱧小夏夏鰯海 女程首程はぼ女 魚魚鮪鮪魚魚鯛鱧す鯨子鮭鯨鰻
翠う吾薊除赤夏夜日う海老海鮑夜ガノ海 菊さ妻矢蟲花除蟲菊菊貝貝ひ漿鼠月蟲ゼナ膽 菊さ妻矢蟲花除蟲菊菊貝貝ひ漿鼠月蟲ゼナ膽
玉高春牛若夏孔金きり菊菊夏かか蒼苔り 嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺嶺 薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄薄 雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪雪 草草草草草草草草草草草草草草草草草草草草
蝙深山紅フ百ひ向一一大ば波麥落荒鋸ダ朝園 蝠山山山山山山山山山山山山山山山山山山山 草草草草草草草草草草草草草草草草草草草草

萱草の花	鈴蘭	蛇髭	擬寶珠	絹笠草	花さるとりの葵	立百合の花	百合草	痛々草	芋法栗	弘法	寛日草	千日草	菫の花	茗荷の子	馬兜鈴の花	山牛蒡の花	麻
蘭の綿花	濱木綿	玉下	月下	芭蕉花	玉卷芭蕉	夏卷芭蕉	篠の蕨	若竹の子	竹皮散	竹葉	筍	早苗	根芋	竹筴	麥門冬	衝羽根	
半夏草	石菖草	溪蓀	菖蒲花	水葵	本郷草	射石草	庭石草	著我の草	花菖蒲	唐菖蒲	燕子花	紫羅蘭	溪蓀	蚊帳吊	太萍	細葉	
綠下	木閣	夏立	茂子	眼子菜	澤瀉	蒲葦	藻の穂	水車花	砂糖黍	麥	鳳梨	青蘆	青芒	青芝	絹糸	藪茗	蝮蛇
青柚	青葡萄	青空	毒根	箱根	瓢箪	鬱金	繡毬	鶯木	忍冬	萬年	石松	卷柏	常盤木	若楓	病葉	新樹	若葉
夏菜	岩菜	山菜	生胡	桑の	枇杷	莓	林檎	桃	楊梅	山櫻	櫻桃	李	杏	青梅	夏蜜柑		
莢	梨	莢	桃	實	杷	檜	實	桃	桃	實	實	實	實	實	實		

お山龍膽	水銀	若菜	藪風	螢草	防風	人蔘	芹香	茴香	たうわ	蘿摩	仙人掌	木曾櫻	柳虎尾	大櫻	虎尾	時計	走り
甘茶	紫陽花	薤白	蒜葱	夏葱	玉葱	甘藍	夏大根	夏菜	花菱	白屈	罌粟	フクシ	待宵草	月見草	菱草	一葉	深山龍膽
野豌豆	都含羞草	碗蓋	金雀	隱元	紅卷	玉卷	青葛	虎耳草	まるすぐり	藤	うぐいす	くろくも	梅鉢	卯草	丹頂	泡盛	
鷹爪	銀葉	夏苺	ゆかり	槐花	合歡	岩藤	夏關	蝶刀	大蠶	虹豆	金剛	甘藷	草合	昇			
松葉牡丹	馬齒莧	石斛	白芍	おほれんげ	麒麟	松葉撫子	亞麻	下野	金蓮	燈臺	編笠	釣鐘人蔘	酢漿草	風露	天竺葵	牻牛兒苗	黃麻
藜	筍	仙蓼	鷄爪	羊蹄	だい	青魚腥菜	蕃薯	粟米	松葉	夏蘭	深山文字摺	衛草	振盛	敦草	鶯草	絡葉	
草	花	蘭	花	う	蓼	花	杏	草	菊	蘭	摺	花	花	草	草	草	藻

障子洗ふ	薄荷製す	澱粉製す	勝栗作る	朝茶湯	柚餅子	柿餅	橡餅	柿羊羹	栗羊羹	衣被	枝豆	鱒子	筋子	鯉漬	鯛の黒漬	新蕎麥	柿臈
水燈會	解馬祭	鞍馬祭	嚴島祭	時代祭	牛神祭	乃木祭	芝神明祭	秋神祭	秋季皇靈祭	神嘗祭	秋の燈	秋の宿	冬の度	團扇置く	扇置く	行水名残	
鬼貫忌	臺灣神社祭	廣澤尊王生祭	灶君公生祭	御取越	夷講	放生會	地藏會	逆の峰入	十字架祭	十夜	寶念佛	六齋待	二十六夜	會津めぐり	六道參	御難餅	
立圃忌	言水忌	子規忌	露月忌	白雄忌	去來忌	千代女忌	蓼太忌	震災忌	許六忌	櫻堂忌	定家忌	太閤忌	乙由忌	素堂忌	西鶴忌	太祇忌	守武忌
稻雀	小山雀	鷓鴣雀	鶯雀	秋の肥猫	馬ゆ	鹿葉忌	紅葉忌	几童忌	宗吾忌	嵐雪忌	芭蕉忌	浪化忌	達磨忌	來山忌	宗鑑忌	梅室忌	
菊載	鶺鴒	交喙	懸巢	鷓鴣	眼白	猿子	即ち	瑠璃	轉子	獺赤	頬白	頬白	鶺鴒	蒿雀	日雀	五雀	四雀

鷹打	鹿狩	鹿木	鹿笛	鹿屋	鹿角切	アマトツボ	誓文拂	秋の蟲干	べつたら市	地芝居	刈上祭	相撲	帝展	菊人形	火戀し	後の出代	後の二日灸
下り築	鯖釣	鮭獵	取替	蟲養	蟲送	落し水	添水	小田守	鳴子	案山子	初獵	鷓鴣	鳩突	鳴網	小鳥網	四網	高換
立毛	新打	藁塚	稻臺	稻幕	稻桶	田寮	稻埋	坪刈	秋耕	霜除	磯釣	根釣	岸釣	網釣	崩れ	築打	
柿の澁	眞菰採	鶯菜蒔	芍藥の根分	牡丹の根分	罌粟の根分	菜種蒔	芥蒔	大根蒔	牧草刈	水見舞	新煙草	黍燒	秋繭	新絹	新綿	新澁	砧
柚味	秋蒲團	蚊帳の果	秋の蚊帳	秋の蚊帳	糸瓜の水取	柴胡掘	藥採	菱採	木藍刈	蘆刈	萱刈	木賊刈	黍刈	胡麻刈	牛蒡引	粟引	豆引
菊	氷頭	裂鮭	新薯	薯汁	燒米	新米	零餘子飯	木の子飯	松茸飯	栗飯	葡萄酒醸す	猿酒	濁酒	古酒	利酒	新酒	

る れ	蘇 鐵 花 菜	蓬 の 花	旋 覆 花	嫁 茶 花	菊 芋	山 路 野 菊	田 五 加	柳 五 加	山 藥 師	藥 師	う ふ く わ う さ	氣 連 草	藤 袴	柳 蓬	富 士 薊	べ に が な	
瓢 冬 簞	錦 荔 枝	含 子 草	烏 香 瓜	苗 の 實	柴 香 胡	唐 辛 子	馬 鈴 薯	蜀 羊 泉	酸 羊 漿	秋 茄 子	二 重 桔 梗	雛 桔 梗	そ 桔 梗	澤 桔 梗	桔 梗		
葛 繪 草	柄 切 草	弟 切 草	蝦 夷 弟 切 草	川 芎 の 花	鳳 仙 花	釣 船 草	麝 香 草	千 層 塔	紫 秋 桐	薄 荷	霜 柱	紫 蘇 の 實	小 白 根	紅 南 瓜	南 瓜	夕 顔 の 實	絲 瓜
犬 蓼 の 實	藍 の 花	え び る	葡 萄	山 葡 萄	野 葡 萄	蔦 葡 萄	み せ ば や	辨 慶 草	岩 蓮 華	秋 海 棠	苦 參	萩 參	藤 豆	南 豆	小 豆	金 鳳	
梨 の 實	茨 瓜 の 實	木 瓜 の 實	吾 亦 紅	ち ん ぐ る ま	龍 膽	千 振	藤 頭	葉 頭	鷄 頭	き か し ぐ さ	千 屈 菜	風 船 菜	溝 蕎 麥	水 引 草	谷 蕎 麥	蕎 麥 花	薙 草
唐 麻	鬼 山 蘿	松 蟲	鳥 頭	仙 人 草	秋 明 菊	仙 翁 翁	仙 翁 翁	萬 年 青 の 實	吉 祥 草	雍 の 花	山 杜 鵑 草	玉 葱 の 花	臺 灣 杜 鵑 草	杜 鵑 草	椶 櫚 草	業 梨	

米 搗 蟲	蚯 蚓 鳴 穴	蛇 入 穴	鴈 鴨	鳴 鴨	初 鴨	鶉 吸	蟻 鳥	啄 木	斑 鳩	鷹 出	燕 歸	渡 り	色 の	秋 鳥	棕 鳥	鴨 鳥	
草 雲 雀	蟻 蛄	部 蛄	竈 蟲	雪 叩	鉦 蟀	蟋 蟀	蝗 蟲	稻 蟲	馬 追	轡 蟲	鈴 蟲	松 蟲	蓑 蟲	屁 蟲	茶 蟲	芋 柱	
太 刀 魚	秋 魚	秋 魚	秋 魚	蜻 蛉	浮 塵	秋 の	秋 の	秋 の	秋 の	秋 の	秋 の	蛸 の	秋 の	蟬 蟬	蟬 蟬	蟬 蟬	蟬 蟬
留 紅 朝 顏	牛 皮 凍	茜 帶 魚	白 帶 魚	虱 目 魚	紅 葉 鮒	ガ サ エ ビ	鮎 魚	黃 魚	鯉 魚	鯛 魚	落 鰻	落 鰻	鮭 魚	鱈 魚	鱈 魚	鮭 魚	鮭 魚
蝙蝠 草	男 蓬	朝 霧 草	薄 雪 草	天 人 菊	岩 野 菊	磯 野 菊	磯 野 菊	哇 唐 菜	秋 野 芥	泡 立 草	秋 の 草	秋 の 草	野 の 草	女 郎 花	男 郎 花	唐 車 前 草	蝦 夷 車 前 草
鴨 花	姬 麟	油 菊	野 菊	濱 菊	田 村 草	さい み ん が	柗 草	紫 苑	三 七 草	ご ま な	コ ス モ ス	蕒 人 蔘	草 八 手	殘 菊	菊 手	貝 細 工 草	

接骨木の實	七竈の實	無患子の實	松花の實	榛果	無花果	南五味子	八朔	栝榴	良莠提	枳椇根	棗根	茶葉	君遷子	柿	木の實	枸杞の實	
荊	漬	ビ	林檎	樺	松	菌	松花	竹	秋	新	衝	柞	さ	フ	コ	ー	
毬	芋	ト	つ	葉	茸	露	蕨	春	根	桃	根	し	プ	ワ	位		
ワ	菜	米	水	大	檳榔	椰	月	茄	木	釋迦	麵	臺	甘	馬	虎	王	樹
豆	豆	菜	芋	菁	子	子	子	子	筍	瓜	果	樹	柿	花	花	蘭	蘭
立	初	寒	霜	冬	冬	冬	一	十	十	師	霜	神	冬	【冬	苜	紅	苧
冬	冬	夜	夜	夜	日	朝	月	月	月	走	月	月	無	部	蕉	柿	
凍	凍	五	冬	寒	冷	冬	冬	除	大	小	寒	寒	節	小	大	冬	小
て	ゆ	ざ	た	め	暖	く	夜	日	日	内	入	分	寒	寒	至	春	
風	木	凍	冬	隙	冬	時	冬	凍	冬	冬	冬	冬	冬	年	春	冬	冬
卷	枯	風	風	風	風	雨	雨	空	空	月	星	晴	日	暮	しく	し	

蓮の實	破引	間	獨活	新胡	菱粉	白粉	菴	芋	里	甘	佛	長	薯	零	破	花	曼	
飛	ぶ	蓮	菜	實	麻	實	花	花	莖	芋	諸	薯	薯	蕪	子	蕉	ナ	
稗	縮	茅	力	王	芒	數	こ	黍	荻	穉	落	稻	稻	粟	鴨	曼	茗	
雀	萱	芝	黍	玉	さ	穂	花	草	華	花	草	華	花	草	華	花	草	
紅	紅	草	草	草	木	秋	鬱	生	露	惹	青	刈	狗	蘆	蜀	眞	力	
葉	且	散	葉	葉	實	花	蘭	花	姜	草	苡	茅	萱	草	花	黍	菰	草
蔓	蔓	根	檀	錦	櫨	鹽	漆	楓	末	柳	色	木	木	木	芙	狸	緒	
梅	冬	橡	梔	椿	桐	榧	銀	銀	團	樞	椎	栗	檜	柏	櫟	枳	椶	
擬	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實
南	杉	椴	椴	だ	通	郁	榧	藤	柑	柚	青	佛	九	橙	金	山	栴	
天	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	蜜	手	年					
の	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	實	

送	三	札	春	厄	年	年	寒	寒	寒	臘	大	和	年	神	來	報
界	公	納	日	神	越	越	念	念	念	八	正	布	越	越	降	恩
主	納	納	萬	詣	詣	詣	行	佛	詣	會	天	列	の	の	節	講
熊	乙	義	五	燕	漱	月	抱	鳳	近	成	一	巢	貞	空	馬	冬
字	士	空	村	石	舟	一	朗	松	美	茶	兆	德	也	琴	節	皇
忌	祭	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	忌	員	帝
鷄	鷄	冬	凍	笹	冬	寒	寒	寒	冬	鯨	兎	狸	狐	狐	冬	狼
始	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	猪
乳	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	鹿
む	鷄	鳥	鶴	鳴	鶯	鳩	雀	鴉	雁				火	鹿		
寒	冬	冬	冬	冬	冬	驚	鷹	鴨	千	鶯	鳩	水	鵲	暖	鷄	木
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	泉
鯉	蚊	蜘蛛	蠅	蝶	蜂				鳥	鶯	鳥	ふ	鳥	兔		
シ	助	壯	海	嫩	紗	潤	鮫	鮎	鱈	鱈	河	氷	氷	凍	雷	八
ヨ																寒
シ																目
ヤ																
モ	宗	鱈	鼠	魚	目	鱈										
寒	冬	冬	冬	臘	冬	冬	豪	木	枇	柀	茶	山	八	鳥	西	鳥
																沙
																毛
菊	葵	椿	櫻	梅	梅	丹	花	蔦	花	花	花	花	花	魚	魚	魚

寄	風	初	酒	湯	お	熱	霰	生	玉	鱒	寒	闇	河	狸	サ	薩	
せ	呂	海	の	豆	で			姜	子				豚	ン	摩	濃	
鍋	吹	苔	粕	腐	ん	爛	酒	酒	酒	酒	造	汁	汁	汁	汁	汁	
生	粕	鯛	芹	鍋	杉	貝	鯨	煮	乾	鹽	鹽	酢	雲	織	海	軍	
姜	味	味														牛	
味																鷄	
噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	噲	鍋	
ハ	干	新	切	大	飯	焼	葛	氷	氷	莖	雜	蕎	蕎	寒	納	藥	
ム																寒	
造																	
る	菜	根	干	漬	入	芋	湯	蕪	腐	漬	炊	湯	搔	卵	豆	喰	
																晒	
冬	冬	冬	冬	避	雪	敷	雪	ス	雪	北	雪	隙	霜	冬	冬	萌	
障	の	の														豆	
子	灯	家	籠	寒	舟	葉	垣	り	吊	ぐ	圍	張	除	構	敷	茶	
炭	炭	懷	溫	湯	行	橋	炬	溫	ス	ス	榻	爐	爐	手	火	疊	
																屏	
御	大	神	酉	箕	熊	御	子	神	吹	新	明	冬	火	助	埋	炭	
火	師															石	
焚	講	送	市	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	節	罩	籠	炭	火	團	

枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 冬 冬 溫 歸 水 冬
 萩 葱 蔦 蔦 芒 葛 頭 葎 顏 蕉 菊 草 草 花 花 花 仙 薇
 鷄 朝 芭 の の の 室 り 蓄

冬 冬 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 ぐ 落 木 冬 枯 枯 枯 枯
 木 紅 葉 露 樺 イ 櫻 茨 藤 柳 葉 葉 葉 葉 蘆 萱 蘇 芝 蓮
 の 松 落 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

寒 葱 冬 蕪 人 大 冬 冬 冬 翻 青 深 萬 百 藪 蜜 冬 霜
 獨 菜 參 根 莓 瑚 瓜 實 實 木 の の 山 兩 柑 柑 柑 柑 柑 柑
 活 菜 參 根 莓 瑚 瓜 實 實 木 の の 山 兩 柑 柑 柑 柑 柑 柑

甘 通 一 紅 含 雪 寒
 品 笑
 蔗 草 紅 竹 花 茸 筍



句集「俳句三十講」「芭蕉燕村子規の俳言」を著はし、卒業後は新藝術俳句の唱導
 と研究等に没頭し、新聞雑誌に俳句と文章を發表する傍ら、「禪之生活」「口」「國
 民書道」等其の他諸雑誌の選句に携はる。その間の著書に「新選俳句手語辭典
 〔四冊〕」「森林」「俳人芭蕉傳」「芭蕉夜話」「感情のけむり」「俳句藝術論」「俳人燕村全
 傳」等あり、希望者へ本書にサインを爲す、返送料要。

著者は——名は中庸、紫舟並に黎明居と號す。

明治三十七年奥州會津に生る。小學校在學中より
 俳句を好み、後早稻田大學附屬第一高等學院に入
 りて早大俳句會を興し大學部に入りて俳句雜誌

「黎明」を創刊し今日に至る。早大在學中に「戀愛俳

昭和十六年一月十五日 印刷
昭和十六年一月廿五日 發行

俳句教書

新 定價 金一圓六十錢



—(版權所有 72.2601)—

著者	加藤紫舟
發行者	東京市神田區猿樂町二ノ八 志水松太郎
印刷者	東京市牛込區市ヶ谷臺町二二 志水松太郎
印刷所	東京市牛込區市ヶ谷臺町二二 大日本出版社印刷部
發行所	東京市神田區猿樂町二ノ八 大日本出版社文莊 振替東京 二二一三四番 電話神田 二二九九三番

栗田書店・東京堂・東海堂
北隆館・大東館・大阪屋號
星野書店・柳原書店・盛文館
彌音社・金文堂・大坪信信堂

加藤紫舟著

四六判二五〇頁
上製・美本・箱入

定價 一圓八十錢
送料 十錢

自句に芭蕉人間學

俳聖芭蕉も人間であつた。人間の道、人間學と云ふものを如何に歩んで來たか。或時は流浪の旅に上り、或時は玉樓に身を置く。と雖も、後世に残る名句は其處に於て一層次から次へと生れ出でて居る。著者は多年芭蕉の研究に携はり、且つ俳人として、その名句を鑑賞し乍ら、その一句／＼に付いて解剖批判を加へ、そして、芭蕉の人生觀と名句を研究茲に一書として斯道の諸氏へ贈るものである。

(容 内)

七芭芭芭芭芭芭容師喜芭敬芭芭
部蕉蕉蕉蕉蕉蕉貌弟怒蕉蕉と
集とのののののの愛體關哀嗜好
問妖膽酒會生國格係藥物祖錢性
答性力落觀觀心格係藥物祖錢性

八ノ二町樂猿區田神市京東
莊文峯社出版本日大
番四三一三二京東座口替振

市川源三先生著

四六判・一九〇頁
美裝・上製

定價一圓三十錢
送料十錢

母の書

女は弱いが母は強い。搖籃を動かす手はやがて世界を動かす。母は遠くを求め、政治にも、国防にも、母の慈愛を以て、母の健康を以て、母の教育を以て、母の生活のあらゆる方面に、母の力をこめて注ぎこむ。母は、母の愛を以て、母の教育を以て、母の生活のあらゆる方面に、母の力をこめて注ぎこむ。母は、母の愛を以て、母の教育を以て、母の生活のあらゆる方面に、母の力をこめて注ぎこむ。

一、母性の優越
二、母の教育
三、母の生活
四、母の健康
五、母の経済
六、母の政治
七、母の国防
八、母の宗教
九、母の藝術
十、母の職業
十一、母の社交
十二、母の家庭

東京市神田區猿樂町二ノ八
大日本出版社 文峯莊
振替口座東京二一三〇四番

今迄に無い良い書道實習講座

2	8	3	6	5	4	9	10	4	3	1	2
楷書の習ひ方	行書の習ひ方	草書の習ひ方	假名の習ひ方	調和體の習ひ方	古法帖の習ひ方	實用漢字楷書帖	實用漢字行書帖	實用漢字草書帖	調和體近世長歌抄	商業書翰文	男子四季書翰文
松本芳翠	田代秋鶴	西脇吳石	松下太虚	花輪翠石	野本白雲	田中海庵	田中海庵	田中海庵	神郡晚秋	黒木拜石	相澤春洋
1	11	7	10	9	6	11	8	7	5	12	12
女子四季書翰文	祝賀贈答書翰文	ペン習字書翰文	實用書式帖	實用書式帖	書道書式帖	短冊色紙の書き方	散らし書きの研究	日本書道要	支那書道要	文字の起原と沿革	書道用具の心得
山野紅蘭	熊田傳一郎	仲田幹一	松本直	大石隆子	相澤春洋	仲田幹一	比田井小翠	諸橋泝水	野本白雲	後藤朝太郎	後藤朝太郎

全廿四冊・各冊七十五錢
優雅和綴・全巻鳥の字
紙用本・精巧セツト
印刷・回數上欄數字は既

(行發・莊文峯・京東)

志水松太郎著

四六判・三九〇頁
挿畫・多箱數入

定價一圓八十錢
送料十四錢

出版事業とその仕事の仕方

多年出版の仕事に従事する著者が體験の一切をブチマケて秘傳ともすべき急所々々を微に入り細を穿つて公開した點は類書に見られぬものがある。多少なりとも出版の道に關したる仕事を参考書である。

〜(次目略)〜

【仕事】の心得、著者の見識、印刷者のか、出版物の種類、整理、編輯、その方と用法、紙算、諸手続、起算、諸取正、事價、本算、配取、定額、紹介、出上、店費、委託、買上、返た、その、法定、半賣、分金、割合、の、例、新、本、参、考、と、夜、圖、書、博、物、館、を、建

東京市神田區猿樂町ノ八
大日本出版社文峯莊
振替口座東京二一三番四

終